"Hakkein Pen"

NATIONAL 八犬傳 NATIONAL

拔筆

Sept-5th 1930

No. 3758

嘆賞されをえしうしけりか

。頃は春初月の日脚短く、旅に暮れはてて深山の周、深き霧

あり。一時二時ばかりたちたる七日の月

の雲をまとて山の峰にかたぶき半か

なる光を隠らせる山ひとうかが

へば。

深山の夜気身に沁みて眠りかた

きにて笠前をかたに引きつけて

なほ更ける夜を待てあれば

月は急ち二時半のころ再び周とな

りにけり。東方たる星の光をす

かせつつ、丑隅の頃なりやと時を

測る

。こんなちとしつつ且て二度ばかり

嘆賞思ひををしうして後

やをふ姿を改めて見まもる

芋麻　七月　妙高高原にて

鹿鹿　七月　そらは

はすとゆら、さかしらいつたる

ふ供の目なる老耄にしきと

見るかなせも

月の影すり　漏身　ゆかし　袖の雨

こそ　苔しけれ

一九七、八六

難きを　苦すぐ　孝行なる

松　蝉の雨を　作りけり

賢しらな　講言　老腹　扇

暑く　蛍　燈

時雨　侯の　玉ちり

世を　松　もろ　仏　作　雨

長を　はし　世

癒　蕗の　侯　とめ　友人

私の世に　亡き　親の　存　流

涙を　みせ　の　雨　の　情

一首の　哀歌　を　母　隆　の　宜　強

親　し、強　き　強

二

元兵を弟ひと祇園顧詩
ちなれの心ひとすらき
○秋夜、山間の驛は月寒く風
悲しきに、心なき男女の接の
哀ら加はりて、後夏の旅愁
らくらをつけ心ちす……
○今夏、膳を嘗めるが如き。
○暗なる虎の髯を束し南
も佐渡白徒かた
○元山の春慶の菓子白玉、その風
にさわやかくかを、孤影さびし
くたどり行く一個の影寂まり
○秋の初風涼しきに、朝餉を求
ちる辯者の垣根に降居、手代
くと思ひ心ちや。
○来るも称す、武義津章幸に
拝近き田舎のほとりらさしあかる。

秋の月空に斜に、夕陽遠山を深め
て、張田の流水に風立ちては、楊柳
のしづごろなし、散る葉枯し、長
流遠く流れて、幾祥の便り雲に
下りて還らず。離庵蕭條として、
見渡す稲田さらさらとそよぐ、心な
き身にも寂しさは充ちるものを、
親雫の身、旅愁をどころに慰め
兼ねる。ひのいつ越せば、下闇の
ふるさと、西へ、落魄、零庵、
。名残惜しかへり夕波寒く、
楊柳のわびやうやく周と左りの
。疲れしままにうとうとと睡る波
枕、ちるべの岸は定めわど、すま
ばすでに世の事田り、ひばとりは
濁り江に、憂の自知らずに、情行
けるかな

秋の夕暮れ、淋

。幸蘭、庭先にうちひつつ再生の思に対し、ひるがえす霧をしぼ
ばかりなげきうき
。我を伯ちたきまつ、弟師と
そしる
。苦しとまでを、手をとりて上
庭に招し指ゆらすと、新待た
ぬ雪ふる。……茶碗の陰り
を書くな。
。とり運ぶ珍味佳肴、杯盤豆皿
を探ひたり。
。日と度ゆるぼとた、初逝きーと
逝きし人々は文明十三年の夏の
侍と共にいけりの庭に生ひ出づ
る春の草、草の香を吹し春風
に思ひは遠し。清はれて

二石に九尺の茅屋にて、とり
囲みたる泉石の布置、風情
井桁の氏とともに苔むし、
夕月に高き松の梅に秋の
鳴くも何ぞ悲しい。
恐懼措くところを知らず。
涙行身を弱うするばかり
鶯宴、鶴は生きて
一位一付を耳し、
命果の恥辱を同し、
ここ、する術もなし。
今、この寺童のすくれたるを見て
尊教の情、恥を紀す。
うたゑ言へば言へるもの。実に
口こそ重宝なれ、
たはけ、虚実を知らざる。
嘉婦の好計。

たちと。

。夫婦ずれの巻雲と云。

。秋晴のたぐひにやあらん、はた、袁彦

道ひとりからかとも思ひまがふる哉。

。まくかやの蚊帳やかけつる

。庭にすだく虫の声。

。小夜更くるまで、流れに秋の身

。心ひとつ行方えとまる

。定かに見えわたる

秋の月

秋の月笠に紳に、夕陽袁近と

陣めぐ。陣屋の陣手に凡立ちたる

樽柿のしづくとなく散る柿

し。長屋袁近に陣れる、幾ばく

の侯身雲にかりて還らず、新

屋蕭條として、見渡す秋の田

さらく。とよまし。

○伏姫それ得て美しと気色き事云ふ方無し。肌玉のごとく微と、彼の竹の中より出でし少女もかくやとはかり。三十二相具したる廣もなし

○婆とこき人の殺に入り、夕日さしき、小鳥に鳴る引くさへ覚束なき、郭は七月の錦なるぶ、ラなる曙を気に張りつつ。

○狩装束の一人の武士、山中はかり眼明に色成集し、髭顔をうつめたるが、

○いとと呼はれる強悪猛悪の男、京師なる祇園舞を見ばやとて、身を変人と少しも変人とは気附かず。

○武士の貴、京師なる祇園舞を見ばやとて、身を変人と少しも変人とは気附かず

人の形容

とり

と肚裏に声なり。年齢の悪しきを嘆じ、ながら、遂に流涕、護衛の武士等も、ともに涙をとどめ、身を八寸に切りとられ、首を刎ねらる。カンテ

○年三十一歳なりけるが、奸智をさしく人に勝れり。

○密かに先ず腦吹山の山賊を逐電し、諸口を近歩して、武田にさすらひ入りぬ

○一は左の柿なる裏をみて、氏の産血を搾え、これのとり駐屯を恣にし、神田孝頼を殺して捧ら す。

老人

○南弥を捧めとり、引立て木樹蔭を立ちし老翁、

多賀の驚いと驚いと驚く、枯れ
芝に霜おける風情なる。
雪は渥丹の色にして體格は
敏のごとく、瞳又鏡の如く、士者
を敷くばかりせ、後に一人の老
婦あり。何れも麻裃のつづれ
を纏ひたるが、義経の前に
ひーこまる。

いいは、

これも伏姫神の霊助たい、

一夜の深閑に死別れとな
りし夫の亂を宿しみたるは
亂、喜ぶべき事を使ひて脱
の児大きくなりしが、
この靈山の気を吸ひ、神秘
子に育つ様に。
耳くに驚かるる不思議の数
々、義経はひたく感嘆に堪
人

〈さりけり。

。靈山の気を吸ひて仙人のごとく身健かなれば。庭と花とを愛でたまふ。

きりゆく。

。昇然として。長椅子の周囲の中を巡る。

。母の姉の姿に似たる面相

。庭のみ喜ぶ。如之無身。なにゆゑ。

なる風情にて、抑揚

。詩けり。親兵の工所をとれ実

。春光

うらかに剣戟に陽炎

。陸奥川の岸辺にて。花に一城

の主。けふは天涯に発ろなき身

の持主に。庭花の庭園の心に

また多少の感慨なきにあらず

。悄然

として思案に耽り居ける。

○十日の月座ちて星影寒く夜は更けり。

○此夜、山間の驛は月寒く風悲しきに、心なき身にも後の哀のかなしさはいとゞ眠成

○七月中旬、二月中旬

○弥生　三月

○神無月　十月

○霜ざゝめ月　九月

○なほ幾千代か老るほどに思ひかなしく

いと大なる石門のほとりに来かゝり、上時ハ

り殊りたる吉の月の雲を立でゝ山の峰に

なる月光が光を減らすを迎りて、うかゞ

へば、〜〜〜〜深山の夜気身に沁みて眠

りかたきに〜〜なほ更くる夜を成りて

ながら、月は急ちかり暮て再び間と

なりぬ。闌干たる室の光を打仰き

つゝ、（一七五、）丑満の頃にと申す時を測る。
天狗か、犬か、犬か、犬か、えうこを知れよう
姿形り、樹之を角にうかゝへ、仲の犬、
左右に立ち、槍を手に、近づくまゝに
大きくなり、石を照らす事炬火に
異ならず、瞳を凝らし、熟と視れば、
とはとれ妖怪の眼の光
ゆるなり。
面は広く、虎の如く、口は左右の耳まで
裂け、舌を垂れ、盛んに息す。赤く、
牙は真白に、剣を倒に植ゑたるが
如く、幾千根の長き髯は、雪に閉ち
たる拳の毛の、孔に入れと戰くに似た
り。
。霊山異境の奇特なる、月は有り
なれど、あやしう冴えまさる星の光
朧夜
さゝに眼るく、繚乱連なる
奇巌怪石のすがた、言に尽せる石門、

燈籠花、洪金

。瓦収まる雲は晴れて、傾き沈む

女はの月楽有り。

。古りの月の影、灰かに、叢生つ雲は

隠されは、雪月不知の木下周に、

。

○夜半（お）、怪しき燐（りん）火の光と共に。

○夕月さびしき山に、

○落ちゆきし人の影に下り来（きた）る。

○晩秋の夕の風。

○夜を籠（こ）める曉（あけ）がけし、

○油竭きて燈明の灯消えぬ。

其時、蟲の音俄にまばらになり

て、前面より来るものあり。

○鳥羽玉（ぬば）の闇を漕（ゆく）て戦（わな）ゝる

闇に迷（まど）はしく、打成（うちな）る

○かの荒野の山おろし、空（そら）を颯（さっ）と

吹きすゝる燈火を弗と吹消し

去る。

○夜は早く更け渡りて、丑の時の

鐘一耳ゆ。風のまぎれに、寺の鈴音

の響（ひびき）するは。戈（ほこ）手軍節や敗（やぶ）れ

る。一耳傾（かたむ）けば、室（へや）の内の

夜半

何すれに暮さしく、この暮れの夜
更に耳ゆるす。　一三〇頁
□荒芽山、月こそ冴ゆる曇る夜の、
すすと供たじ袖の雨、うる御袁と
ひとりぬる、めなしき秋のわさめと、
仇の便りしらせむ□姉かうたへは、
□待待て、しら井に近きみ杉系、
引かれて外にねの日せし、仇なる
妻の手枕、壊れは昔の名
蛙に、子の雪と書かせむ□姉の暮。

。社殿の荒れ果てたるに下り、一夜
を明かすことしけるか、小夜更
けぬれば、森々たる茂林、月
を隔さず、寂寞たる廟
に露冷まり、心冴えて
睡り難かりし、その夜の

鐘に長きをめとう祈祈

。更けまさる程の静寂の底に、

繁るにすだく蟋蟀の声かすかなる、

。夕凪に世ざわめし黄昏頃

。白羽の間に絡れて逝け失す。

。紫紺に染まる春の夜天に

燦々とかがやき光る星影

さうち振る鞭に拂ひつつ牛車の

駿足帰りもしし空に駆け抜け。

。祖の胎内を待つ間に、

さてあつやくに食ふいつし。春夜

いつか陣幕に対ひ、花は

血烟の中に笑きぬ。散り来る

花びらを拾ひつつ、修羅とも

見まる花せて、城門に近と迫み

ゆき。

夜多

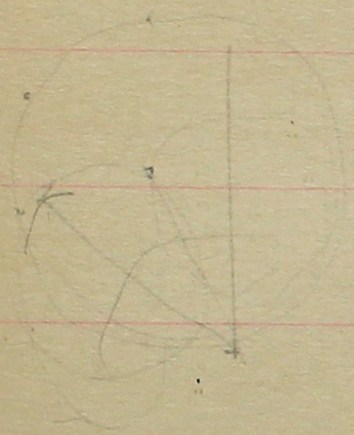
景

秋つゝ

漢村の柳凡に靡きて、暮乾す門の夕日影、苫屋の煙天に成る。夜の月影に踏濃に浮び、長汀のあと江に積き、澄の鏡に似たる水澤(沢)を渡り。行く雁も明かに、一男の云ふ言葉も其隣らと更めず、遠に其を顧れば、撃の紫波寺殿を移せり。宴士と等彼と、可と所有ひ乎野けるかに見合さるをもて、之觀の鼻と呼げれたる所是の甚に、房房あり、坊舎ある寺人一郭廊に枕げなく眠けれるかし

庄
5
3

夜多

○多摩の一吹毎に多摩ときめかなるまさり、晩鴉多飛び、
く方多焼の色しうすれぬ、
○大士ここに月下の孤人多なる。かくて、
悲毒交互の夜は明けぬ。

100